

『レンマ学』

中沢新一*著、講談社、2019年

松井信之†

アリストテレスの時代にはよく知られるところとなっていた論理の三法則、すなわち、同一律・矛盾律・排中律は、三位一体となり、近代にまで至る過程で、人間の思考のモデルとなり、また、その思考に基づく社会認識を形づくってきた。私たちは、この三法則に基づく思考をロゴスと呼ぶ。ロゴスが動詞レゴーから派生した名詞であり、レゴーは、「よせ集めること」、「話すこと」、「数え上げること」という3つの意味を持つことはすでに山内得立の『ロゴスとレンマ』（1974年、岩波書店）において示されている。レゴーから派生したロゴスの視点では、何よりも言葉に基づいて物事の本質を理解し、事物の存在を捕捉せねばならないとされる。ロゴスに基づく事物の本質とは、何よりも事物の諸性質と本質を区別することを第一とし、それはまた、主語と述語、主体と客体などの分別を伴い、この世界を構成する諸事物を類型化^{カテゴライズ}することへと私たちの思考を導く。

しかし、山内は、古代ギリシアにおけるロゴスとは別の思考のあり方に着目した。「レンマ」がそれである。レンマの思考は、「直観によって全体をまるごと把握し表現する」思考である。中沢新一氏の『レンマ学』の基本的な視座は、大乘仏教經典の『華嚴経』の思想にレンマのあり様が体系的に示されているというものである。すなわち、本書は、山内がかつて提示したレンマの知の可能性の探求という課題の延長線上で、大乘仏教における『華嚴経』の「法界縁起」の思想に遡り、その体系性を取り出し、また、それと南方熊楠の粘菌研究との密接な関係を重要な導きとして、華嚴的な「法界縁起」の力学を量子論や数論、また、言語や芸術の領域にも見出さんと触手を伸ばして、「法界縁起」の思想を現代的に復活させることを試みる。この意味で、中沢氏は、今日において自然科学と人文科学のあいだに広がってしまった大きな裂け目の再統合を試みているとすることができる。

本書の構成を以下に示す。序章と「エピローグ」にくわえて、レンマ学を導出するための南方熊楠流の知的生命論（第1章）、大乘仏教における「縁起」思想と『華嚴経』の読解に基づく知性論の導出（第2章～第5章）、レンマ的知性からの無意識の読み替え（第6章～第8章）、「数」の純粹なあり方についてのレンマ的な再構成（第9章～第10章）、レンマ的知性と表現としての「言語」一般の結びつき（第11章～第12章）。さらに、中沢の知の遍歴を絡めるかたちで本書の内容を凝縮して伝える「付録」が3篇。また、本書が生まれる背景にある影響関係を知る上でも興味深い「あと

* 明治大学野生の科学研究所所長

† 立命館大学立命館アジア・日本研究機構客員研究員
matsuinoby1988@gmail.com

がき」——以上が本書の構成である。仮に、ここで本書を、(1)『華嚴経』や『大乘起信論』を中心とした「レンマ」の知の構造解明、(2) レンマの観点からの「無意識」の再考、(3) レンマ「数」論、(4) レンマと表現としての言語の関係という4部に分けることが可能である。また、3つの付録に関していえば、それぞれが本論の論理展開を補完するものとしても読むことができる。とはいえ、付録1「物と心の統一」は、『レンマ学』に至るまでの中沢氏の知的関心であり続けた物と心を統一的な視野のもとに収める視点とは何かという問いにたいして、神経科学やレヴィ＝ストロースの人類学、ハイエクの『感覚秩序』から「自生的秩序」論までの発展、言語論、詩論などを連関させ、仏教思想の空論のもとへと包摂されるという論理展開をおこなっている点で、本書の生まれる背景としても読めるだけでなく、本論の全体を凝縮的に示していると言える。12章の本論に加えて、3つの付録などから成るうえに、すこぶる難解な内容も含まれる本書の内容を要約的に示すために、先に便宜的に示した本書の4部のうち最初の1部を軸に要点を絞ることで、本書の内容を概観したうえで、評者からの若干のコメントを付すことで書評としたい。

さて、その軸となる部分では、『華嚴経』にくわえて、主に法蔵(643-712)の『華嚴五教章』と馬鳴めみょう(アシュヴァゴーシャ [80-150頃])作とされる『大乘起信論』に基づいてレンマ的知性＝「法界縁起」の構造的な理解が得られる。「法界」は「存在の全体」を指し、「縁起」は「法界」を形成するあらゆる事物の結びつきを指す。また、その「法界」が「空」であり、縁起のなかで生ずる事物間の力の波及を支えている。レンマ的知性は、この「法界縁起」のレベルで働く。レンマ的知性は、ゴータマ・ブッダに発する仏教思想に固有のものではなく、例えば、アボリジニーのような先住民の思考における脱主体的な自然宇宙の連続性というコスモロジーや南方熊楠が粘菌に見出した全体を直観する知性のあり方に見出されてきた。だが、狩猟採集社会から農耕社会への移行によって、その思考は忘却され、ブッダがあらゆる事物は自我も含めて自性を持たないという「縁起」を説くことでレンマ的知性を復活させて以降、独自の発展を遂げていくことが指摘される。

『華嚴経』は、ブッダの入滅後に縁起の原体験を言語化せんとして編まれた大乘仏教経典であり、縁起を「空」の論理として思想的体系化を図ったナーガルジュナの中観思想や、心を起点として本来的に「空」である状態から事物が形成されることを説く唯識論との弁証法的な対立を止揚するために4世紀頃の中央アジアに現れた仏教経典である。『華嚴経』では「法界」の構造を、大楼阁が無限に連なり、相互に音を発して響き合う空間としてイメージ化し、ロゴスの制約を受けながらその全体の響きを現象世界に伝える者としての菩薩の役割の重要性などが説かれる。

以上の「法界縁起」の思想を厳密化するうえで重要な思想書が『華嚴五教章』と『大乘起信論』である。これら2つの仏教思想書がよって立つ基本的思想は、あらゆる事物は法界の「空」の働きを共通項としてもち、相互に結びついており、どの事物ひとつとってもそれ自体として存在するものはない、というものである。『華嚴五教章』では、法界の全体的な原理としての「空」に支えられた諸事物の連関という関係が「相即」と呼ばれ、それに基づいて諸事物のあいだに力の伝達が働き、一方の力が弱まり、他方の力が強まることで特定の事物が顕在化する関係が「相入」と呼ばれる。この「相即相入」の力学でもってこの現象世界を全体的に把握することが、レンマ的な知性の解明にとって不可欠である。というのも、「相即相入」する「法界縁起」の力学から世界を把握することは、一切の事物が一つの全体のなかに含まれ、また全体の働きが一切の事物の一つ一つを通じて表現されるという「一即多、多即一」の原理において世界を理解することを意味するからである。

また、『華嚴五教章』と『大乘起信論』の共通の特徴は、レンマの作動への理解と無理解(煩悩)

とが相互に切り離されていないということである。『大乘起信論』では、いかに煩惱ないし「生滅心」がレンマ的知性ないし「真如心」から派生してくるのが問われ、真如心と生滅心が一体となって人間の意識が形成されることが示される。それらが一体となって「アーラヤ識」が形成されるのである。中沢氏は、現代の神経科学の知見と接合してこれを理解しようとする。その論旨は、まだ差別化されていないエネルギーの流れが脳内の中枢神経系統に流れ込み、ニューロンで一定の刺激信号として処理されることで分別をもつロゴス化された情報に変換されるというものである。このロゴス化の過程で、レンマとロゴスの知性とは絡まり合い、「アーラヤ識」を生み出すことが示される。

このような科学的な知見の背後にレンマ的知性の活動が絶えず働いているという主張が展開されていく。それに続く議論も同様のかたちで「レンマ」の構造を解明するための多角的なアプローチとして展開される。まさにそれは、華嚴思想にある「一即多、多即一」の関係のもとに——多角的な視点をレンマ的知性のもとに——包摂する試みであると言えよう。続く議論では、フロイト＝ラカンの精神分析における無意識の概念が「アーラヤ識」と同様のものであり、レンマ学の視点からそれを超える「レンマ的無意識」の作動の存在が示される。レンマ的無意識の存在を示すために、中沢氏は、ドゥルーズ＝ガタリやマテ・ブランコらの無意識に関する議論がレンマ的無意識の作動に触れていることを強調し、ユングの「共時性」や「^{アーキタイプ}元型」などの諸概念を「レンマ」との結びつきで再解釈していく。

次に、レンマ学と数論の結びつきに関する箇所での議論の基本線は、ハイゼンベルクが切り開いた量子空間を示す「マトリックス」の数列を「レンマ学」へと接続することである。ここで「数」は、自然数という個体ではなく、縁起的にその他すべての「数」をある「数」の内に相互に内包するようなマトリックスのなかにある動態的な「数」である。つまり、レンマ「数」論は、量化可能な数の秩序の背後に実体なく縁起し合うなかで計量的な数へと生成する様相を量子力学に基づいて理論化しようとするものである。あたかもそれは、リーマン予想が素数の謎を通じて「数」の臨界へと迫っていくような困難さを伴うものであろう。「レンマ学」にとっては、無意識と意識が接触する境界面に遡って「数」なるものを把握するために、主に華嚴経と量子力学を接合する必要がある。

最後に、言語あるいは広義に表現を扱う箇所では、レンマ学から言語や芸術表現について論じられる。ここで、中沢氏は、言語学や考古学の知見に基づいて、人類に言語能力が生じたと同時に、数を数えるという能力も生まれたと考えられるが、それらがレンマ的な知性の作用によって可能になったという見方を提示する。言語の統辞的な側面（連辞〔シンタグム〕の軸）に対して、隠喩的な側面（範例〔パラディグム〕の軸）が強く働く芸術表現を通して、世界全体の脱主体的な連続性を表現する試みが絶えず行われてきたことは、レンマの関与を端的に示している。この点で、古今の優れた芸術表現は、「ホモサピエンスの心／脳の構造を持つ生物が地球上に出現したその瞬間の記憶を留めるものであり、かついまだ実現されていない未来に属する認識に触れようとしている」（296頁）。

以上はごく基本的な論旨のみを焦点化したものであるため、縦横無尽に展開する本書の議論の躍動感をそぎ落として伝えていることは断っておきたい。それにしても、これまでの中沢氏の諸著作と比べて、本書は、厳密な体系化を明確に志向しているという点で際立っている。確かに、レンマ的知性を軸として、無意識・数・言語・芸術などを連続的に捉えようとするとき、レンマそれ自体を表象することは不可能であるがゆえに、それらの連続性も大胆な仮説にとどまるとも言える。くわえて、本書では触れられていない政治・社会領域の問題——権力、資本主義、暴力など——がい

かにレンマ学のもとに収めることができるのかという問題も、続編として書かれる（と「あとがき」で宣言されている）『華嚴的進化』で展開されることを大いに期待する。本書は、あたかも多くの数学者たちを魅了し、ときに（ジョン・ナッシュのように）精神を苛むまでに追い込むリーマン予想のような力を持つ「仮説」であるが、就中この「ポスト・ヒューマン」の時代において、人類にとっての別の知性のあり方を十分な説得力を持って提示している。